面接調査の経験

巻頭言

京都大学大学院教育学研究科教授　岩井八郎

もう30年も前のことになる。アメリカの大学院に留学したとき，最初のセメスターで社会学研究法の入門的な授業を受講した。3つの課題があったのだが，その1つが面接調査であった。大学周辺の地図を渡され，受講生はペアになって担当すべき地区を割り当てられた。訪問する地域は安全な住宅地で，大学と近隣住民との関係は悪くない，身分証明書を持参して，大学の授業の一環として実施しているので協力してほしいと言えばよいとのことだった。ペアで男女5名ずつの計10名集めるのがノルマだった。できるかぎり，年齢の異なる住民に調査するようにとも指示された。調査票は，主に分配の正義に関する質問文が並べられていた。人物の学歴や仕事内容に関する記述があって，給料がフェアかどうかを評価するような形式だった。英語も心許ないうえに調査できるのか不安だったが，調査のお願い文を何度も練習して暗記し，調査に向かうことにした。

ペアを組んだ相方は，メキシコ系の男子学生だった。週末に2人で割り当てられた地域に行き，それぞれひととおりアタックして，結果をみてから次にどのようにするか相談することになった。要領のよい学部学生だった。数時間後に待ち合わせをしたときには，すでに5名の調査を終えていて，「あとは頑張りな」という調子でさっさと引き上げてしまった。私のほうは，「けんもほろろ」に追い返されたり，アメフトをテレビ観戦している最中だから，試合が終わったころに来いと言われて，その時間に行ったら誰もいなかったりと，予想通りもたついていた。1人残されたときは，あと2名，女性の回答者を集めなければならない状態だった。

日も落ちてきて，仕方なく何軒かアタックした後，誰もいないと思われた家の扉が開いて，若い女性が現れた。断られるかなと半ばあきらめながらも，調査の目的を話し協力をお願いした。すると，「私は大学でこのような授業を取ったことがあるから，協力してもよい」と言って，家の中に入れてくれた。椅子も出してくれて，座って調査をすることができた。正直，とてもうれしかった。

あと1人女性を調査しなければならない。さらに何軒か回ったのだが，見つからない。ある家に，「プー太郎」風の若い男性がいて，気安く，「自分でよければ，いつでも協力してやるよ」と言ってくれた。女性に調査しなければならないので，他を当たってみると答えたものの，少し近くを歩いた後，薄暗くなってきたので，彼にお願いしてしまった。いわゆる「割当法」による面接調査である。テキストに指摘されている調査員による「バイアス」を自ら体現してしまった。

今でも記憶によく残っているのは，大学で社会調査関係の授業を受けた経験があるからと言って協力してくれた女性である。社会調査士関係の授業の充実が，長い眼で見て調査環境の改善にもつながることを教えてくれる。